The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	The Narrator’s Presentation of the Source Material in Philostratus’ Apollonius
Author(s)	Katsumata, Yasuhiro
Citation	文芸学研究. 2016, 20, p. 64-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73161
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ピロストラトス『テュアナのアポッローニオス』における語り手の情報の取り扱いについて

勝又泰洋

本稿の目的は、ローマ帝政期の知識人ピロストラトス（後 170～250 頃）が著した『テュアナのアポッローニオス』における一人称の語り手（＝「私」）が、自らが処理すべき情報群について何を述べているか観察し、それらの言葉がピロストラトスの創作戦略のなかでどのように機能していると考えられるか分析を試みることである。

アポッローニオスの「正確な像を提示する」（ἐξακριβῶσαι、1.2）ことを目標に設定するこの語り手は、自らの語りの中で、「情報源」や「情報伝達経路」、また、「情報の価値」や「情報の信頼度」にしばしば言及し、こうすることによって、自らを一種の「情報編集者」として提示する。これら「情報の取り扱い」に関する発言の中で最も重要と思われるのは、「ダミス文書」についてのそれ（1.3）である。語り手が言うには、アポッローニオスの世界旅行に同行し、この人物の言行を逐一記録したダミスという男が作成した文書を「書き換える」（μεταγράψαι）よう、彼は皇后ユーリアに命じられたという。

「ダミス文書」には、アポッローニオスについての「真実」のみが書かれていると考えてよいように思われるが、彼のさまざまな「情報の取り扱い」に関する説明を眺めていくと、話はそう単純ではないことがわかる。彼は、そもそもこの「ダミス文書」の作成方針や作成手順について明確なことを述べておらず、この文書の内実が読者に知らされることはない。ダミスはアポッローニオスについての「すべて」を記録することを欲したようだが、事情によりそれが叶わなかったこともあったことを語り手はところどころで示唆する。また、語り手自身も、基本的には「ダミス文書」の記述にしたがってはいるようだが、

ある部分に関しては情報の取捨選択を行っている。

語り手の「情報の取り扱い」についての言葉遣いが明らかにしているのは、さまざまなレベルで情報操作が行われている、ということである。語り手は、「正確」な話を伝えることを目標に掲げながら、話の根拠となる情報の処理方法の基準については曖昧にしたままである。彼は、真剣な目標設定の言葉とは裏腹に、アポッローニオスについて「正確」なことを述べることは不可能であることをわかっている。語り手による「情報の取り扱い」に関するしつこいくらいの言及を通じて、ピロストラトスは、「真実」への到達が困難であることを、メタフィクション的に読者に通知しているように思われる。